

黒田家所蔵『能淨一切眼疾病陀羅尼經』に関する考察

金鍾珉（九州大学）

『能淨一切眼疾病陀羅尼經』は中国唐時代の不空(705～774)が漢訳したもので、600字ほどの短い經典である。經典の内容は、眼病にかかった信徒が如来に平癒を祈願し、それを受けて如来がこの陀羅尼を製作し、それを阿難に流布させたというものである。

本写經は、元は折れ本だったようだが、渡日後、表装をする過程で巻本に変わったものと考えられ、現在は変相図と本文のみが残っている。発願文や刊記はなく、製作時期も明らかではない。しかし本写經がハングルで記述されているという大きな特徴から、ハングルの文法および表記法の変化、ハングルの書体等をもとに、製作年代を推定することができる。本発表の目的は、この『能淨一切眼疾病陀羅尼經』の製作年代を、より明らかなものにするることである。本写經の製作は朝鮮王朝時代前期に該当するので、まず変相図に見えるチベット仏教の図像を通じて、中国明時代の写經との影響の関係を検討する。また同じ時期の板本変相図の図像との関連についても考察する。

また、現存する韓国の写經の中では唯一の、ハングルと漢字を併用した写經であるという点に着目し、韓国語学の研究成果を通じてハングルの変遷過程とハングルの書体変化を分析する。ハングルは、1446年、世宗によって頒布した後の変化と発展の過程がはっきりとしており、それ故に本写經のハングルの表記を通じて製作時期の推定が可能であると考ええる。

ハングルの書体は、最初に作られた『訓民正音』の書体を基本とし、様々な書体に変化する。訓民正音体は隸書を模した書体で、板本体と呼ばれる。以後しだいに発展し、筆写のために用いられる楷書へと変化していく過程は、本写經の書体分析を通じて明らかとなる。また漢字の書体も、朝鮮王朝時代の前半期に大流行した趙孟頫体が使われているが、純粋な趙孟頫のスタイルではなく、様々な書体と混合し、変化したものといえる。これは朝鮮王朝時代前半期に流行する書体の変化と流れを一にしている点で注目される。

朝鮮王朝時代は仏教の弾圧が行われた時代であった。仏教美術は、高麗時代の全盛期以後、衰退の一途をたどる。しかし王室と貴族を中心として經典と仏画の製作が続けられ、仏教の教義を守り続けた。朝鮮王朝時代の写經の場合、前半期までは、高麗時代の影響を受けた高麗写經の図像と様式をそのまま伝えるが、世祖の代に至っては、写經の作例や製作記録などが見いだせない。それ故に本写經のような作品を製作できる階級は、王室や貴族であったと考えられるのである。また『朝鮮王朝實錄』における、ハングルを制作した世宗から壬辰倭乱(文録の役)までの記録から、本写經が16世紀朝鮮王朝時代明宗代の作品である可能性が高いという見解を提示する。